

EU Institute in Japan, Kansai

～Academic Symposium～

EUIJ 関西 アカデミック・シンポジウム

“Lodz in the European Union—City Renovation and Restoration—”

よみがえる『約束の土地』

—ポーランド第2の都市ウッジの魅力と都市再生—

関西学院大学産業研究所

EU Institute in Japan, Kansai
～Academic Symposium～
EUIJ 関西 アカデミック・シンポジウム

“Lodz in the European Union—City Renovation and Restoration—”
よみがえる『約束の土地』
—ポーランド第2の都市ウッジの魅力と都市再生—

目次

“よみがえる『約束の土地』—ポーランド第2の都市ウッジの魅力と都市再生—” 藤井 和夫（関西学院大学経済学部教授）	p.3
“EUにおけるウーチ Lodz in the European Union” 市川 顕（関西学院大学産業研究所准教授）	p.7
“ウッジ市 日本語教育を通して見た四文化都市” 吉田 勝一（ウッジ大学国際関係学部講師）	p.9
“Lodz – a University Town Universities and city revitalization and city branding” Prof. Tomasz Domanski (University of Lodz)	p.16
“AMAZING CITY ŁÓDŹ – THE LAST UNEXPLORED CITY” Prof. Marek Janiak (City Architect of Lodz / Professor, Lodz University of Technology)	p.25
“グローバル競争環境における都市政策について—大阪・関西と欧州都市の事例考察—” 藤原 直樹（大阪市立大学経営学研究科附属先端研究教育センター特別研究員）	p.28
登壇者紹介	p.30

よみがえる『約束の土地』ーポーランド第2の都市ウッジの魅力と都市再生ー
藤井 和夫
(関西学院大学経済学部教授)

ポーランドは1795年にロシア・プロイセン・オーストリアによる分割のために国家が滅亡します。19世紀に何度も独立の回復を試みますが、成功しませんでした。19世紀の後半に、文化や産業で国をもう一回盛り立てようという動きが出てきて、そんな現れの一つがウッジという工業都市の形成になります。その後、1918年にポーランドは独立を取り戻しましたが、それもつかの間、20年後にはポーランドにナチスが侵攻するという形で第2次世界大戦の火ぶたが切られます。その後、解放され、共産党（ポーランド統一労働者党）政権が長い間、ポーランドをリードしていきます。ワレサの「連帯」運動を経て、1989年にご承知のように、社会主義体制は崩壊しました。それからさらに15年、いろいろな苦労があった中でEUに加盟して、今日を迎えています。現在、ポーランドは経済状態も非常に良く、トuskという前の首相がEUの閣僚理事会の議長（EU大統領）になっており、EUメンバー国としてもだんだんその存在を高めています。

ここに古い時代のポーランドの地図を示しました。色の付いたところが分割される前のポーランドで、非常に大きな国です。現在のウクライナの西半分やベラルーシ、バルト三国の一部まで加えたような広い範囲でポーランドが成り立っていましたが、色の付いたところで分割されました。太い赤い線は、123年後に独立を取り戻した第1次世界大戦後の国境です。前に比べるとだいぶ小さくなっています。それがさらに第2次世界大戦後には、もっと西の方に移動した形で現在の国境があります。ウッジはその中で、Kaliszというまちのすぐ横にあります。ですから、現在は国の中央ですが、かつては国のだいぶ西の方にあったということです。

ちょうどポーランドがそのように分割されて国がなくなったころ、ヨーロッパは産業革命の時代でした。これはポーランドの小学校副読本の歴史地図からのコピーです。青色がドイツで、その横がロシアです。ロシアとドイツとオーストリアに分割されて、ポーランドはありません。このようにポーランドの分割時代は、ヨーロッパ全体は産業革命の大きなうねりの中に巻き込まれているときです。

そういうときに、一時、ロシア皇帝から若干の自治を与えられ1815年のウィーン会議で成立するポーランド王国の大蔵大臣だったルベツキという人が、国を建て直そうということで、ウッジ地方のレンビェリンスキ県知事などと諮って、この場所に産業を起こそうとしました。当時、産業革命の時代の産業といえば繊維ですから、繊維工業を起こそうということでイニシアチブを取ります。そして1820年ごろに、このような都市計画というか、工業区をつくります。ほとんど政府所有の森だったところに、区画整備をして土地を開いて、まちをつくります。そこに繊維の職人や繊維業をやっている人たちをどんどん招き入れて、産業を起こすということをしていきます。

どんどん招き入れる職人たちはどこから来たかという、産業革命でイギリスから工業製品がどんどん流れ込んでくるのに困っていたドイツ方面の少し古いタイプの職人たちが、自分の故郷ではもう暮らしていけなくなって、いろいろなものが提供され、便宜を与えら

れるポーランドに、呼び掛けに応じてどんどんやって来ます。ドイツ方面から、このまちにチャンス求めてたくさんの人がやって来るといったことが起きました。もちろんもともとポーランドにいた職人たちも集まってきますが、それ以上にドイツやチェコなどからたくさんの方が来たというのがウッジのまちの始まりになります。

もともとウッジは770人ほど住んでいたところから、新しく作られた南に向けたまっすぐな通りを中心に居住区を開いていき、人口が急速に伸びていきました。このスライドは先ほどの北の方にあった古い地区で、ここにまちの市役所などができ、ここからすんと通りを通してまちづくりを始めます。これが最近の同じ場所の写真です。都市計画ですから、ピオトゥルコフスカという名前の真っ直ぐの通りが走っています。私の聞いた範囲では、ヨーロッパで一番長い真っ直ぐの通りだということです。これは私が数年前に撮った写真なので、古いですが、このような賑わいを持った通りが続きます。

どのようにまちが発展したかということをご理解いただくために、人口増加と民族構成を書きました。最初は770人でした。1820年には800人ほどでした。その後世紀の半ばまでに、4700人、5000人、1万人、2万4000人、3万人、そして世紀の半ばから20世紀初頭に欠けて16万人、50万人、45万人、60万人というように、急速に50万都市、60万都市へと発展していきます。

非常に興味深いのは、ウッジのまちの人口の民族構成を見ると、ポーランド人がかなりいるのは当然として、ポーランドにもともと都市の3~4割はいたユダヤ人も多いですが、この町はとくにドイツ人が非常に多いことです。先ほど言ったように、ドイツ方面からの職人がたくさん入ってきたので、例えば急速に人口が増えている1894年、19世紀の最後のころを見ると、ポーランド人が7万人ぐらい、ドイツ人が6万人ぐらい、ユダヤ人が4万ぐらいで、合わせて17万人ぐらいです。ちょうど三つの民族から3分の1ずつぐらいいるような状況も出てきました。ポーランドの中では例外的にドイツ人の数が多いというのが特徴です。

最後に、国が減んでいる間にも産業発展して、50万人ぐらいの人口になり、国内第2位の都市に既になっていて、繊維工業、しかも多民族の国際的なまちだということ言えると思います。「国際的な」というもう一つの要因は、後で出てきますが、なぜここでこんなに繊維工業が発展したのか、できた繊維製品をどこで売っていたのかというのが非常に特徴的です。それは後で見てください。

このまちにやってきた人々は、最初は産業革命に押された古いタイプの職人だったとしても、まちでどんどん繊維産業に従事することによって、いい家を建てて、最後はお屋敷を建てるような立身出世というか、ビジネスの成功をかなり約束された土地とみんなから言われて、人がたくさん集まってきました。ですから、ポーランドのウッジは「約束の土地」と呼ばれることになりました。

移住してきた人たちが住んだのは、当初はこのような小屋のようなものでした。このような小屋だって、彼らにとってはチャンスをつかむ良いきっかけになりました。そんな人たちが、やがてまちの中で、現在も残っているのですが、こういうりっぱな住宅を建てました。先ほどの大使の話にもありましたが、ウッジは第2次大戦のときに戦災に遭っていないので、明治村や大正村のように、その当時の建物が全部残っています。きれいなお屋

敷がたくさん残っています。建築の好きな方は、行かれるといろいろなスタイルの建物を見ることができます。今日、それは非常にきれいに保存されています。これはウッジ市にお借りした写真ですが、上から見ると、最初に区画整理をしたまちがだんだん大きくなってきています。

このまちは、そのように外国から、特にドイツ方面から多くの人が出てきてつくりました。後でご説明するように、繊維製品なども非常に国際的な環境の中で発展していきませんが、もう一つのこのまちの特徴は、まちをつくったのが実業家たち自身であるということです。ビジネスマン、働く労働者たちが町を作ったということで、軍人のまちでも、政治家のまちでも、貴族のまちでも、王様のまちでもないという特徴があります。市民たちが自分たちでつくったまちと言えらると思います。これは通りにある銅像です。両サイドの人がドイツからやってきたシャイプラー、ガイエルという人で、真ん中の人がもともとポーランドにいたポズナンスキというユダヤ人です。それぞれ大きな工場を持つようになります。

これはシャイプラーの工場、ヨーロッパで一番大きい規模の紡績工場、織物工場です。ポズナンスキはユダヤ人ですが、彼の工場は、同じぐらいの規模の紡績工場と織物工場が一緒になったものです。今日、この工場は破産してしまつてつぶれていますが、新しい形によみがえっています。これは後でご紹介できらると思います。

多くのポーランドの農民たちがまちに出てきて労働者になることもあり、商人や企業家や技師など、内外のいろいろな人がたくさんこのまちに出てきて、「約束の土地」として夢を抱いて、自分たちのキャリアを積んでいきます。市民のまちというのはどういう意味かというところ、ここはロシア領でした。ポーランドのウッジの繊維工業は、ロシアの産業にとつてみれば言うなればライバルです。ウッジのまちの発展に関心を持たなかつたし、どちらかというところ非協力的だったので、ロシア政府は鉄道も引いてくれませんでした。そこで、ウッジの企業家たちは自分たちで鉄道を引いてしまいました。駅を造つて、ウィーンとワルシャワの幹線まで25km近く、鉄道を自分たちで引きました。駅の名前はウッジファブリチュナ（ウッジ工場）駅といい、その工場駅と鉄道はポーランド市民が自分たちで造つた市民の誇りだったので、このファブリチュナ駅は現在つぶされてしまつてありませんが、映画にしょっちゅう出てくる場所なので、映画ファンは涙が出るような懐かしい駅の写真です。

先ほど申し上げた国際的な環境のもう一つの要因についてお話しします。これは先ほどの地図ですが、白いところがロシア領です。ロシアは産業革命後、自分の産業を守るために非常に高い関税を外国商品に掛けました。ロシアには、ドイツやイギリスなど外国の繊維製品が入つてこられない状態になっていました。しかし、ウッジはロシア領の内部に取り込まれてしまつたから、例えばイギリスの機械をすぐに輸入して、非常に高い技術で、高いレベルの最新の生産を行い、西側とのつながりを持ちながら繊維工業ができたので、ロシアの国内市場で製品がどんどん売れました。ですから、ロシア領だったということであらう立場でしたが、産業の発展にとつては好条件をうまく生かしました。

ウッジで作られた繊維製品の7割から7割5分はロシアで販売されました。ロシアで売つたりでどんどん作りました。一部はシベリアを通過して、中国でも販売されたといわれ

ています。どれぐらい発展したかという点、非常に広いロシアの中で、ウッジはほんの一部ですが、ポーランド王国はウッジが繊維工業のほとんど中心でしたが、ロシア全体の4分の1ぐらいの生産をウッジだけでやっていたというようなまちになりました。

これは先ほどのポズナンスキの工場の裏です。古い工場がつぶれてしまって、この写真にはあまりつらくて出していませんが、繊維産業は構造的な不況業種なので、随分寂れました。先ほど言った国際的な環境がポーランドの独立を取り戻すとともに、東側のロシアの市場が失われるなど、いろいろな要因があつて、繊維産業はどんどん寂れていきました。つい最近まで、ウッジはある意味では産業的になかなか厳しい状態に置かれていました。多くの工場が破産したりつぶれたりしましたが、現在そのような工場跡が利用されています。ポズナンスキの工場跡には、マヌファクトゥーラという、生産工場という名前をそのまま付けた、ポーランド最大規模のショッピングセンターが造られています。大きなホテルも造られています。これはショッピングモールの中です。ウッジのまちは今まさに再活性が行われて、元のウッジが繁栄していたころの工場跡などの遺産を使いながら、現在、新しい取り組みが行われています。

今日、後ほどご紹介しますが、もっと大規模な、もっと新しい試みが、ウッジで始まっています。大阪なども、このウッジを見習って、日本の中の大阪の再生を学んだらいいのではないかという気がしますが、そういう状態になっています。ウッジでは今、新しいまちづくりとして、これはヤニアクさんたちが準備された写真をお借りしていますが、ものすごく大規模な工事が行われていて、今のウッジのまちは、1カ月目を離すと全く様変わりしているような状態です。

そのようなウッジのまちをこれからいろいろな方たちに順番にご紹介いただけたらと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

EUにおけるウッチ Lodz in the European Union

市川 顕

(関西学院大学産業研究所准教授)

皆さんこんにちは。関西学院大学産業研究所の市川と申します。先ほど藤井先生から、ウッジに対する愛情溢れるプレゼンテーションがありました。私はウッジではなく、クラクフというところに2年間留学していたので、ある意味ライバルです。従って、より客観的にEUというレンズを通して、ウッジというまちの魅力、可能性についてお話ししていきたいと思えます。

私は、関西学院大学でEU研究、EU教育に関する責任者をしています。学生の皆さんに主にお伝えしたいのは、今、EUというものがグローバルなアリーナで非常に大きなアクターになっているということです。もちろんポーランドも含み、EUの加盟国は28にも及びます。人口は5億人を超えており、アメリカの1.6倍あります。それからGDPもアメリカより大きいということは、覚えておくべきことだと思います。このようなEUという地域統合体の中にポーランドが存在するというのを、まず知っておいていただきたいのです。

ポーランドがEUに加盟したのは2004年です。先ほど藤井先生や大使のお話にもありましたが、ポーランドでは1989年に東欧革命が起きました。そして、そこから15年間の体制転換期を経て、2004年にEUに加盟しました。この間、EUに加盟するために非常に大きな努力をしたわけですが、今、加盟してからちょうど10年を超えたところにあります。これは皆さんの理解のために付けた表です。

では、EU加盟国の中でポーランドはどの辺りに位置付くのかというのがこの地図です。ご覧になってお分かりのとおり、ポーランドはEUの東端にあります。青いところがEU15といわれる、2004年以前にEUに加盟していた国です。濃い青いところが2004年に加盟したところなんです。そうすると、ポーランドはEUの東の国境に面しているということになるので、ウクライナやベラルーシなど、新しい、これから発展の可能性のある国とボーダーを接しているということがお分かりになるのではないかと思います。

先ほど藤井先生からお話がありましたが、ポーランドは徐々にEUの中で頭角を現してきました。EUのVIP人事の中で、欧州首脳理事会常任議長(通称:欧州大統領)にドナルド・トラスクという前の首相が就任したのは、皆さんご案内のとおりだと思います。従って、どんどんEUの中でもメイン・アクターになってきているというのがポーランドの現状です。

さて、時間がないので、少し飛ばしてお話をしていきます。まず、地理的にウッジがどこにあるかということです。先ほどご案内がありましたが、ワルシャワという首都がここに位置しています。それから、私が留学していたクラクフは南にあります。日本で言えば、ワルシャワが東京、クラクフが京都という感じだと理解していただければと思います。ウッジはワルシャワに近い位置にあって、大体百数十キロという距離にあります。

人口については、日本の大使館の数字なので、どちらが正しいか分かりませんが、クラクフとウッジが非常に近い人口になっています。ですから、第2の都市はどちらか分かりません。私はクラクフを推していますが、要するに2番目の大きな都市のひとつであるということになります。

ここで皆さんに強く強調しておきたいのは、ポーランドは政治においてもそうですが、経済においても、EUの中で今日非常に大きな地位を占めつつあるということです。皆さんにご覧いただきたいのは、この表です。これはGDP成長率を表しています。ピンク色がEU、紫色がポーランドです。ご覧になってお分かりのとおり、2009年、リーマンショックがあって、ヨーロッパ中の経済が冷え込んだときに、リーマンショックの影響をヨーロッパ各国は全て受けましたが、ポーランド1カ国だけは、リーマンショックをプラス成長で乗り切ることができました。そのことは、ポーランドという国の国民の勤勉さ、ポーランドが受け入れた多くのヨーロッパの産業の足腰の強さ、といったものを如実に表しているのではないかと思います。

これは交通です。左が鉄道、右が道路です。ワルシャワに近い場所に位置するウッジは極めて便利な場所に位置しており、都市として大きな発展可能性を持つインフラストラクチャーを有しています。

このようにして考えていくと、ポーランドという国は、賃金もEU15に比べればまだまだ安いということもあって、さらなる経済発展の可能性を有していますが、私自身が一番注目しているのは、ポーランドが教育レベルの高い労働者を非常にたくさん抱えているということです。例えばこれは失業率です。私が留学していた2002～2004年は大体20%といわれていましたが、最近では10～15%の間で推移しています。今、皆さんにご注目いただきたいのは、こちらのグラフです。ポーランドの非常にきちんと教育を受けた質の高い労働者が、イギリス、オランダ、ドイツをはじめ、多くのEU各国の中で非常に需要が高いということは強調しておくべきことではないかと思います。

そんな中で、このような教育レベルの高い学生を育てる機関として、大学があります。後で吉田先生とドマンスキ先生にご登壇いただきますが、ウッジ大学はポーランド国内でもトップクラスの非常に高いレベルの教育を提供しています。ちなみに、総合大学ランキング1位のヤギエウォ大学はクラクフにあります。私はヤギエウォ大学ではなくて、クラクフ経済大学に留学していたので、別にここで誇るべきことはないのですが、ウッジ大学が非常に高いレベルの教育を提供していることは理解できるかと思います。

そこで、最後にパネルディスカッションのために少し申し添えておくと、先ほど藤井先生は、ウッジの歴史から、ウッジという都市が今後どうやって発展していくべきかというお話をされていたと思いますが、私の観点からは、EUがあって、その中でポーランドの役割があり、そして、そのポーランドの中でのウッジの位置付けを考えて、都市再生を進めていくことが非常に重要なのではないかと考えています。

後で藤原先生にお話しいただきますが、都市の再生は日本でも喫緊の課題になっています。その際に最も重要なのは、都市をどのようなものとして位置付けるかということではないかと考えています。従って、都市がどんなアイデンティティを自分に付与するのか、外からどう見られているのか、自分の都市はどうなりたいたいのかというようなことを考える際に、藤井先生のおっしゃったような歴史のみならず、今日的な文脈の中で、EUの中のポーランドの中でのウッジということも考える必要があるのではないかと考えます。私からは以上です。

“ウッジ市 日本語教育を通して見た四文化都市”

吉田 勝一

(ウッジ大学国際関係学部講師)

ウッジ大学の吉田です。今回、ここにお招きいただきありがとうございます。現在、ウッジに住んでいる日本人の中で、一番長いのではないかとわれています。ウッジのまちに35年ほど住んで、日本語教育、日本文化の紹介を続けてきました。

最初に、一番新しいウッジの写真をご紹介します。これが先週の日曜日に撮ったウッジのまちです。この中央の部分は大学のキャンパスだったところです。このキャンパスを横断するような形で、ウッジファブリッチナ駅(Lodz Fabryczna)に続くメインストリートが現在建設中です。これが開通すると、ウッジ再開発計画のメインステージ完成となります。私たち国際関係政治学部キャンパスは、まさにこのメインストリートを包括する中にありましたが、ご覧のように今、校舎は右側と左側に分かれてしまいました。

今回は、大体このような順序で、ウッジのまちについてお話をしていきたいと思います。

- 1、戦前 ー 歴史的背景
- 2、戦後 ー 大学教育とハリウッジ
- 3、体制変換期 ー JICA 協力隊、ボランティア受け入れ
- 4、現在 ー ウッジ市日本週間、文化交流事業
- 5、街の生活と1年
- 6、新しい試み ー 変わるウッジ変わらぬウッジ

最初は、歴史的な背景です。

1332年にLodkaという川の名前で出てきたのが、ウッジのまちが地図上に出てきた最初、現存資料に残されている最古の年号です。右下にあるのがウッジのまちの紋章です。この田舎で小舟を造っていたことから、このような小舟を取り入れた紋章ができました。藤井さんのお話にあったとおり、その後どんどん人口が増えていきますが、1821年当時はまだ770人余りの小村でした。

そのころ東欧のランカーシャと呼ばれる工場の礎ができてきました。ウッジのまちは、工場経営者たちが積極的に自分の工場、まちに投資をして、インフラ整備を始めいろいろなものを造っていき、まちづくりが行われました。ここでは、ユダヤ人、ドイツ人、ロシア人、ポーランド人の4民族が入植してまちをつくったということで、ここに四つの文化(Miasto czterech kultur)が融合して新しいウッジというまちの文化がつくられていきました。普通の一般的な繊維産業都市ではなく、4民族4文化の融合された非常に珍しい形態のまちづくりができました。そのようなときに建設されたまちの建築様式がアールデコ様式(Secesja)のもので、都市の建築的な価値としても非常に興味深いまちです。

このまちに繊維産業ができた基本的な条件としては、①ポーランド王国 (Krolestwo Polskie) の直轄地として入植者に有利な条件で土地が与えられたこと、②周辺に豊富な建築木材や蒸気機械の動力源である地下水、小河川が豊富であったこと、③ワルシャワから

130kmの地の利があったことが挙げられます。その様子は、レイモンド (Stanislaw Reymont) が1899年に『約束の土地 (Ziemia Obiecana)』という作品を発表し、それを基にしてアンジェイ・ワイダ (Andrzej Wajda) が映画化しました。これも藤井先生の話や大使の話にあったとおりです。

2、戦後 一大学教育とハリウッジ

1945～1948年ごろまで、このまちはワルシャワが第2次世界大戦中、壊滅的な被害を受けた関係で、首都を代行しました。そのころから映画産業が大きく飛躍し、1990年代までに約600本の映画をこのまちで作っています。その関係もあって、ウッジの映画人たちは、ハリウッドになぞらえて自分たちのまちを「HOLLY LODZ」という呼び方をして、誇りを持っています。

1945年に六つの国立大学ができました。映画演劇大学 (Panstwowa Wyzsza Szkola Filmowa, Telewizyjna i Teatralna)、医科大学 (Uniwersytet Medyczny)、音楽大学 (Akademia Muzyczna)、ウッジ工科大学 (Politechnika Lodzka)、ウッジ大学 (Uniwersytet Lodzki)、ウッジ美術大学 (Akademia Sztuk Pięknych w Lodzi) です。これがまちに現存する学長センター (Rektorat) の建物です。自由化されてから、18の私立大学ができ、ウッジのまち自体がポーランド中央部地方圏の教育文化都市になりました。

その一つの私たちウッジ大学では、14学部、学生、院生、研究留学生数約4万人、教員数約2300人という規模で学生たちが学んでいます。特筆すべきことは、私たちの国際関係政治学部 (Wydział Stosunków Międzynarodowych i Politologicznych) が、1995年のヨーロッパ平和50周年の記念事業として、EUとポーランド、EUと世界、そしてアジアの関係を理解、研究することを目的として、学生のために開設されたことです。ここに開設当時から、関西学院大学から藤井先生を中心にした各分野からの研究者が来てくださり、学生たちに日本のさまざまな内容の講義を続けてくださっています (*注1)。これはわれわれスタッフにとっても共同研究という立場から非常に貴重であり、学生にとっても日本学研究へのモチベーションという面から、有意義な教授を続けてもらっています。

その関係で、学生たちも日本に関して、正しい知識を持つことができるようになっていきます。私たちのところでは、単に日本語を教えるだけでなく、日本語を通して日本を正しく理解、判断できる学生を育てたいと思っています。そのためには、実際に日本の事情をよく理解している日本の研究者に来てもらい、直接話してもらうのが一番プラスになっています。単に日本語を上手に話すだけでなく、日本に対して正しい判断ができる学生を育てていく。それが関西学院大学との交流で可能になっています。これは日本関係を専攻している学生たちの写真です。

3、体制変換期 一JICA 協力隊、ボランティア受け入れ

ウッジのまちでは、1992年から2007年までの間に、JICAの青年海外協力隊の隊員派遣前最終訓練プログラムを受け入れました。ここに派遣された日本人隊員たちは、まずウッジのまちの人たちとのホームステイ、交流を通して、語学学習のほかポーランドの習慣、ライフスタイルなどを学んでいくという機会を持っていました。この派遣事業は2007年に

終了しましたが、それ以降は、民間の派遣機関から日本語教師が派遣されるようになり、そこでも同じような派遣業務をウッジのまちで続けています。

なぜ、ウッジのまちでこのような派遣業務を受け入れるようになったかということの一つには、社会主義のときにポーランドに留学する全ての学生たちは、ウッジ大学にあるポーランド語研修センター(Studium Języka Polskiego Uniwersytety Lodzkiego)に集められ、まずそこで語学訓練を受けて、それから各大学で勉強、研究を続けたという歴史があったからです。それで他の海外から集まる留学生たちもウッジで勉強していました。

4、現在 —ウッジ市日本週間、文化交流事業

ウッジのまちでは、日本語教育の他に、いろいろな文化事業をしています。これは一般市民を対象とした集まりの様子です。それから、社会人高齢者大学(Lodzki Uniwersytet III Wieku)というものがあり、そこでも高齢者の皆さんが日本の勉強をしています。また、日本からいらした方たちとの交流をしたり、芸術関係の人たちがコンサートを開いたりしています。これは来てくださる方の善意と、私たちのボランティアの関係で結ばれているもので、商業ベースにのらない草の根交流紹介活動です。

また、武道も盛んで、武道稽古(剣道、居合道、合気道、柔道、空手、弓道、古武術など)や文化活動もしています。右側の写真は、ウッジのまちと日本ポーランド協会関西センターとの交流事業を記念して記念植樹をしたときのものです。ウッジの植物園の中で植樹を行うことができました。

その他に、ウッジ市では、1982年からは、毎年テーマを決めて「日本週間(Dni Kultury Japonskiej)」というものを続けています。ポーランドにおけるこのタイプの行事としては、一番古い行事の一つです。

このスライドは、今年行われた一番新しいものです。今年度は「日本映画の100年」というテーマで、日本映画に関してのいろいろなレクチャー、催し物をしました。これは、そのときメイン会場の博物館、それから会場に集まった人たちです。毎年5~6名の日本人留学生、日本語教師が集まるので、このときに集まった日本人をウッジの人たちに紹介しています。この男子学生は関西学院大学からの留学生です。ウッジ大学の学生たちも、今回のテーマでいろいろな発表をしました(*注2)。

もう一つ大きなプログラムとしては、講義を聴いたりするだけではなくて、親子で楽しめるプログラムを作ります。日本語教育をしていく中でも、日本語は学校、クラスの中だけで学ぶものではなく、周辺の人たちに日本語教育への理解、必要性を持ってもらわなければ続けていくことができないので、このような機会に親子でプログラムに参加してもらい、日本文化を理解してもらおうという行事も続けています。これも今年のもので、

その他にいろいろな展示会も企画しています。

5、街の生活と1年

これは1年のまちの様子です。

これは1年の生活です。冬はかなり雪が降って寒くなります。

これはマヌファクトゥーラ(Manufaktura)です。自由化以降の再開発プランの一つとして、

市内中心部にあった繊維産業大工場跡を、ショッピングゾーン、博物館、ホテルなど市民の憩い、娯楽施設として再開発したもので、新生ウッジを象徴する地域の一つです。敷地面積はヨーロッパ有数の大きさです。

現在は市民生活の中で、なくてはならない場所の一つとなり、地方や外国からお客さんが来ると、まちを代表する名所として、市民のだれもが必ず案内する場所となっています。現在もさらに開発が継続されている、進行形地域です。

6、新しい試み ―変わるウッジ変わらぬウッジ

ウッジのまち並みは、以前はこのような感じで他のまちとは少し違って、まちの壁にいろいろな国営企業の絵や製品が描かれていました。これは社会主義のころの壁画で、ペーベックス(Pewex)という国営ドルショップの絵です。その他にこのようなデパートの絵などたくさんありました。

それが現在は、市が中心になって、芸術家にこのような場所を提供して、まち並みに合ったいろいろな壁画(Mural)を描いてもらっています。動植物、風景、人物、抽象画など様々な絵がたくさんあります。歩いていて、まち並みを楽しめます。この壁の絵は、ヨーロッパでは一番大きい絵とされている1枚です。これが現在のまち並みです。

10月の末に、まち並みを一般の人に楽しんでもらおうということで、夜はこのように明るくライトアップして、まちを夜散歩(Light Move Festival)してもらいました。これも今年初めて行われた行事です。

ウッジ大学と関西学院大学では、5年ほど前から学校間協定の中で、学生たちの交流事業を結んでいます。これは今年ウッジに来てくれた関西学院大学の学生たちです。ここで学生たちと学部長が、都市と大学教育についてのいろいろな話し合いをしました。この写真のようにテーマ別に研究発表をして、お互いに意見交換をします。このような行事ができるようになりました。

今年6月初めて、ウッジ市日本語スピーチコンテスト(Lodzki Konkurs Krasomowczy)を企画し、小学生から社会人高齢者まで参加者を募集して、日本語を楽しむフェスティバルを開催しました(*注3)。ここまで来るまでには、今まで日本側からいろいろな人たちが来てくれて、いろいろなアドバイスをしたり、私たちに協力したりしてくれました。そういう歴史の中で、ここまでこのような活動をすることができました。

このような活動ができるようになったきっかけをつくってくれた、梅田良忠(1900-1961)という人がいます。その人のことを最後にご紹介して終わりたいと思います。この人は1900年に東京に生まれて、小さいころから病弱だったので、お寺でずっと療養生活を送りながら、曹洞宗に入門して、駒澤大学の仏教学部を卒業、曹洞宗の留学僧としてドイツへ留学しました。その途中の船の中でポーランド人(Stanislaw Michowski)と知り合って、その関係でポーランドへの留学を決め、ワルシャワ大学に入学しました。1925年に卒業した後、約15年間、ワルシャワ大学で日本語教育に携わり、ポーランドの日本語教育に多大な貢献をしました。

この梅田良忠が日本に帰国してから、再度またポーランドへ行きたいと言ったときに、当時、ポーランドは社会主義で梅田良忠にはビザが発行されませんでした。ですから、そ

れ以来、ポーランドには死ぬまで行くことができませんでした。この方が亡くなる直前に、自分の息子（梅田芳穂）をポーランドで育ててほしいという希望を遺言にたくし、それを引き受けたのが、ウッジ大学考古学部の当時の教授だった人(Konrad Jazdzewski)でした。その人とは面識がなかったのですが、文通や論文で知り合っていた関係で、この梅田良忠の息子さんがウッジのまちへ来て、そこで青少年時代を過ごしました。その息子さんはその後、ポーランドで「連帯」活動が起きたとき、その中心的な役割を果たすように成長されました。

この梅田良忠は、亡くなる直前まで関西学院大学で東欧史や哲学を教えていました。その方の遺品や文献は、経済学部藤井先生に引き継がれて、その後、藤井先生がいろいろな活動をしています。私と藤井さんが留学先のウッジのまちで偶然知り合って、それ以降その関係が続けられています。その関係もあって、関西学院、ウッジ大学との結び付きの基盤がつくられ現在に継続されています。ですから、急にできた関係ではなく、今までの長い歴史の中で、人と人との友情、深い結びつきの中で、今私たちが結ばれているということを紹介させていただき、発表を終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

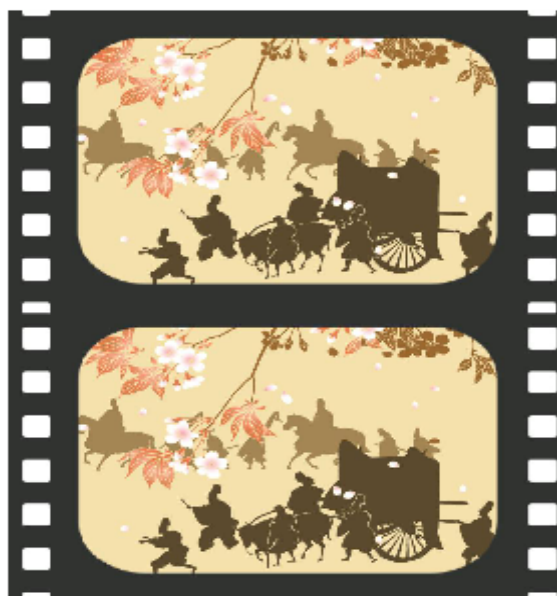
注1 ウッジ大国際関係政治学部日本学集中講座を担当した関西学院大からの主な教授陣
田中敦氏、平山健二郎氏、野村宗訓氏、打桶啓史氏、田中きく代氏、望月康恵氏ほか

Dni Kultury Japonii w Łodzi

03-07. XI. 2015

ことしのテーマ
日本映画の100年

“100 lat kina japońskiego”



*miejsce:

Muzeum A i E, Łódź, Pl. Wolności 14

Organizatorzy:

- *Ośrodek Języka i Kultury Japonii im. prof. Ryouchu UMEJY w Łodzi
- *Muzeum Archeologiczne i Etnograficzne w Łodzi
- *Pod patronatem Ambasady Japonii w Polsce

Współorganizatorzy:

- *Zakład Azji Wschodniej Uniwersytet Łódzki
- *Łódzki Uniwersytet IIIw.
- *Japonistyka WSSM w Łodzi
- *IFE Politechnika Łódzka
- *II LO w Łodzi
- *Tow. Japonia-Polska Oddział Kansai w Osaka

Informacja: <http://www.bunka.org.pl/>

プログラム 「日本映画の100年」

企画/主催

(法) 梅田良忠教授記念ポーランド日本教育文化センター

共催

国立ウヅジ国古学民族学博物館/ウヅジ大学東アジア学科/
ウヅジ第三大学/ウヅジ国際大学日本学科/ウヅジ工科大学/
ウヅジ県立第2高等学校/日本ポーランド協会関西センター

後援

在ポーランド日本国大使館

メイン会場

国立ウヅジ国古学民族学博物館多目的ホール

2015年11月3日(火)

17:00 日本ウィーク閉会式

17:20 虎一川本喜八郎の人形世界と神話
吉田和泉

18:00 記念映画会「日本映画の100年」

大島渚監督作品、1995年、52分

19:00 閉会記念会

2015年10月4日(水)

17:00 「時代劇とチャンバラ」日本映画の歴史想像
マグダ ヤクブチック

17:45 記念映画会「赤ひげ」黒澤明監督作品
1965年、185分

2015年11月5日(木)

17:00 「日本ホラー映画—日本人は何を怖がるのか」
ベアタ ミルチャレク

17:45 記念映画会「羅生門」黒澤明監督作品
1950年、88分

2015年11月6日(金)

17:00 「日本アニメーション映画の歴史」

ドミニカ ガウエンザ

17:45 記念映画会「乱」黒澤明監督作品
1985年、162分

2015年11月7日(土) 親子で楽しむ日本ウィーク

12:00 子供映画会「ポニョ」宮崎駿監督作品
2008年、101分

13:45 子供日本ウィーク おりがみ、書道体験、
みんなで歌おう、ゲームと遊び、
日本クイズ大会など

協賛行事

2015年10月11日 茶道紹介と体験 料生新子、
衣川やよい、衣川純一、考古学民族学博物館内
日本センター

2015年11月16-30日 日本人形展

中央区図書館 A ストールガ通り14番地



**「第1回
ウッジ市日本語スピーチ大会」**

**PIERWSZY ŁÓDZKI ZJAZD
KRASOMOWCZY JEZYKA
JAPONSKIEGO**

ウッジ市の大学、高校で日本語を学ぶ学生や社会人が、日頃の学習・練習の成果を発表する「第1回ウッジ市日本語スピーチ大会」を開催します。テーマは自由で、それぞれの学習進度に応じて気軽に発表してください。優秀なスピーチ、個性的なスピーチに「熱弁賞」「発音賞」「文法賞」などを差し上げます。

記

△開催日=2015年6月20日(土)午後1時
△会場=考古学民族学博物館多目的ホール
△スピーチタイトル=自由。趣味や自分の将来の夢などを加えた自己紹介程度で可。
△スピーチ時間=3分以内。原稿を読んではいけません。暗記してください。
△出場申し込み=5月7日(木)までに、各校の日本人の先生に口頭で。
△出場校・出場者数=国際大学(7)、ウッジ大学(7)、工科大学(5)、第2高校(2)、市民講座(2)、社会人大学(4)、留学生(?)
人数は目安であり、多少の増減は構いません。

△Data -
20. VI. 2015 roku, w sobotę od godz. 13:00
△Miejsce :
Muzeum Archeologiczne i Etnograficzne w Łodzi, Sala Audiowizualna.
△Temat :
dowolny lub prezentacja swoich zainteresowań oraz planów na przyszłość .
△Czas prezentacji :
do 3 minut. Nie można korzystać z kartki. Mowa powinna być wygłoszona z pamięci.
△Termin zgłoszeń :
7. V. 2015 rok, czwartek. Zgłoszenia przyjmują nauczyciele języka japońskiego.
△Udział
WSSM, UŁ, PŁ, II LO, ŁU III W,
Lektorat Języka Japońskiego,
Studenci zagraniczni.

ウッジ市日本語スピーチ大会実行委員会
(法) 梅田典忠教授記念ポーランド日本教育文化センター

Komitet Organizacyjny oraz Ośrodek Języka i Kultury Japonii im. Prof. Ryocho Umedy w Łodzi.

“Lodz – a University Town Universities and city revitalisation and city branding”

Tomasz Domanski

(Professor, University of Lodz)

Mr. Ambassador, dear Prof. Fujii, dear colleagues, ladies and gentlemen, I am really sorry that I can't speak Japanese, so please excuse me that I am going to deliver my speech in English.

As you know, I am the Dean of the Faculty for International and Political Studies at the University of Lodz. I would like to devote my presentation to the concept of Lodz as a university town. I would like especially to stress the role of universities in city renovation and city marketing.

As you know, the city of Lodz is a university town. We have around 100,000 students and 750,000 inhabitants. We have seven very good public universities, with strong international strategies. In this room I can recognize some Japanese students, who not only visited our city but were studying at our Faculty one or two semesters. We are very open as an academic city and we welcome international students. I am also sure that in our city we develop strategic partnership between the university, city, and foreign investors.

The city of Lodz was also called the Paris of the North. The city developed at the end of the 19th century, and one of its most famous palaces - the Poznański Palace, was called the Lodz Louvre. This historical architecture is the testimony to industrial and financial power of the city in the late 19th and early 20th centuries.

Public universities have today become new managers of city heritage because, as you will see in my presentation, several historical buildings now belong to universities, which took a very active part in their renovation. So, we may say that the universities are real partners of the city in revitalization.

Personally, I am a professor of marketing, and one of my favorite topics is city marketing and university marketing. It is quite a new topic, not only in Poland but also in the world. We have to find some marketing synergy between the promotion of the city and the university. Public universities are very strong constituent elements of the city, which is why the city of Lodz is promoting itself as a city of universities. Such partnership creates a new kind of relationship between city and its universities. We are very much in favor of interdisciplinary projects and we are promoting the city as an influential university center, and the image of the city is very much connected with its universities.

As you can see now in my presentation, there is a very strong relationship between city marketing and university marketing. Our university is located in a student-friendly city. I would like to stress the fact that the city of Lodz is strongly oriented toward students. It is a city friendly to young population and students.

You can see here some data. I told you before, that in Lodz we have about 100,000 students. Out of these 100,000 students 70,000 study at public universities. Our University, which we are representing here together with Prof. Masakatsu Yoshida, has got more than 40,000 students, so it is one of the biggest universities in Poland.

One of our former presidents used to say that there are three very important universities in Poland: the Jagiellonian University, which is the oldest, Warsaw University which is the biggest, and Lodz University which is the best. [Laughter] Of course, it was just a joke of our former president, but we really believe in our University and we believe in our city, and of course we do our best just to create very high quality programs and to attract very high quality students.

In Lodz we also have a technical university (Lodz University of Technology), with about 20,000 students, and it is a very good University. Prof. Janiak, who is going to take the floor after me, represents the Faculty of Civil Engineering, Architecture and Environmental Engineering from this University. We have a very good Medical University with a very open international program taught in English. We have a lot of students because Poland is very popular as a place for medical studies because this education is not so expensive here, while the quality of teaching is very high, so we have a lot of foreign students also from the United States and Canada, from Scandinavian and Asian countries coming to Poland and studying medicine because the quality of these studies is very high.

We also have the Academy of Fine Arts, which is involved in some cooperation with the Academy of Fine Arts in Osaka. Our Academy in 2015 awarded the Honoris Causa Doctorate to a very famous Japanese designer Junko Koshino. We should also mention the Academy of Music, which welcomes a lot of Japanese students who come to study Chopin music and take part in the International Fryderyk Chopin Piano Competition. Finally, we have a famous Film School in Lodz. I am not going to develop this topic but the School is very well-known, the best in Poland, and one of the three best film schools in the world, after the London School of Cinema and the Los Angeles Film School. And, as Masakatsu said before, we have in also in Lodz more than ten private universities.

Now I would like to have a look at our city much more from the students' perspective. When you choose a university, you take into account the city image and the university image. You choose the best place where you would like to be. The city and the university would like to be perceived as good and nice places to study and to live.

I think that one of the main challenges for the city of Lodz as a university town is to create a kind of synergy between the city, universities and the business community. This is a strategic triangle of good cooperation between all partners. We observe this excellent cooperation here in Osaka. We also have such cooperation in Lodz. I think that this partnership is becoming now very popular in the world: cooperation between the city, university and different Polish and foreign investors. I would like to develop this aspect in my presentation because it is also connected with new thinking about Europe and cooperation with the environment.

In my presentation you will find much more detailed information, but I am not going to read it all. When we think about a modern city today, we mean an intelligent and smart city. I also believe that we need to talk about students-friendly city. It should be open and the students should like to stay in this city. The city should take care of students, and create different kinds of programs that would really help them to develop their potential. A city open to young people should create some facilities for them. It should also be open to new ideas. Nowadays, we talk a lot about innovation, entrepreneurship and creativity. In Lodz there are several places which are open to this kind of activities. One of the best and newest examples is the EC1 complex, a former electric power station. It will soon become one of the most important centers in Poland and Europe combining culture, creativity, science, and new media.

An academic city should also be financially available to students. Fortunately, Poland is still not too expensive for young people looking for a good higher education. We know that education in the world is becoming more and more expensive. The cost of living in Lodz is still not too high and there are a lot of facilities. Young people may enjoy studying at a good university in a very nice and green environment. You have a lot of green areas in and around the city and Lodz is a city with a future. But when we are thinking about the future, we also have to think about the past. We have to be able to build a bridge between the past and the present of this city. This bridge should be oriented towards the future. We should still develop this historical spirit of entrepreneurship, which was the foundation for creating this city by very different people. And I think in the future this kind of spirit will be continued.

So, at this point I have just brought several arguments confirming why young people

should study in Lodz. There are a lot of universities. There is well-developed infrastructure. There is also a big 100,000 student's community. We have long-lasting university traditions. We may also offer low cost of living. There are several arguments in favor but I am sure that young people will pick five or six, the most important for them. I believe that they may find the best combination for them, in order to justify their choice of this place.

The city of Lodz is a post-industrial city. It was full of big factories. They were not only very big, but they were the biggest in the world in the 19th century. The only comparison we could make with these factories would be the factories in America, in Boston and Chicago. These factories were located in the city center, because that was very fashionable in the 19th century. In Lodz we are lucky to have and maintain this historical infrastructure until the present days. Each of these the biggest factories (Scheibler or Poznanski) at that time employed between six and ten thousand people. At that time they were also the biggest factories in the world. We can still feel this entrepreneurial spirit of the 19th century.

Today, public universities have taken over some of those industrial buildings and they have become good managers and administrators of city heritage. They have importantly participated in the revitalization of these factories, giving them new academic life.

I also believe that the future development model of the city of Lodz is to be open to multicultural business environment. As Prof. Fujii told us in his presentation, the city was created by a multicultural community of Poles, Jews, Germans, Russians, and other people coming from different countries. Today, it is also very important to take the best practices from the past but also from some contemporary European cities.

We may say that the specificity of Lodz consists in the location of many academic units in historical buildings. I will show you some photographs. Public universities, by taking over these premises, contribute to the regeneration of culture and the natural heritage of a multicultural city.

And I will give you some examples of these models, which are typical of Lodz.

First of all, I have to stress this New Harmony between the past and the present of the city. In the case of Lodz, innovation consists in seeking some creative harmony in combining old and new functions of old architecture. We are using these old factories and palaces and give them new identity and new functions. It is very important to talk

about this synergy of academic space and new urban surroundings, which have also become some distinguishing promotional characteristic of Lodz as a university town.

So, we may say that the specificity of Lodz consists in the presence of many academic units in historical buildings, as I told you before, this form of management and renovation of such infrastructure is a very interesting and original solution.

I will start with some photographs showing this strategy.

I think that we have seen this photo already in the presentation of Masakatsu Yoshida. It is the Academy of Music. In Lodz, a lot of projects are connected with the biggest entrepreneurs of the 19th century. One of them was Israel Poznański. This is the palace which belonged to one of his sons. Today this magnificent building hosts the main office of the Academy of Music. It is not only open to students, who study here, but also to the local community. I think that one of the key challenges of Polish academic institutions for the future is to become more open to the local community. Public universities should remain attractive to students but they also have to be more open to the local communities. This is also one of the priorities of the European Union. European projects are usually co-financed by the city, the region and European funds. When we are talking about the role of the European Union in this kind of renovation projects, we have to stress that the European funding may cover up to 65 or 70 percent of the total cost of the project. So there is clear synergy between European funds and the renovation of these buildings for universities. I think that the total amount invested in renovation of old buildings and in construction of new ones exceeds EUR 100 million in the city of Lodz. It is really a lot of money because the whole operation also required own contribution from the universities. But we have to say that this renovation effort would not be possible without the European Union funds.

This is a second project, connected with the Lodz University of Technology; we call it Polytechnic School for engineers. This is today the Central Library of the Lodz University of Technology. It is only one part of this campus because the whole campus is a former industrial site developed over 32 hectares. It is a very big post-industrial historical space in the center of the city. It is also very important, in the case of Lodz, that all these factories were situated in the center of the city. This city planning concept will certainly be developed later by Prof. Janiak. In the 19th century in Lodz main factory buildings were situated in proximity of the palaces which belonged to factory owners. This was also mentioned by Prof. Fujii.

Today, in Lodz we still have very big industrial sites in the city center. On my slides

you may find more detailed description of each of these sites. I am not able during my presentation to tell you all the details, but you may find some more information on how it was developed by public universities.

This is also a very interesting example of renovation of an industrial building. It is the International Faculty of Engineering (IFE). It also belongs to the University of Technology. IFE is a Faculty of Engineering but for the international community. We have partnership cooperation, because in Lodz I have been responsible for 25 years already for a French MBA program. They also organize studies in French and in English, and we are cooperating very closely because they are also training engineers in English and in French.

So, it is a very good example of this strategy. On the one hand, you have a very good example of regeneration, but also you may see a new and modern building, which was developed on the old foundations of the old space. Hence, I think that it is typical of Lodz to keep the old part of post-industrial infrastructure and bring, thanks to its modernization, some new functions and new academic and educational space.

This is also the same building but seen from the other side, so you may see the name IFE. So, it is not really big but very consistent because, it is situated in the same complex of the city.

Now, I can present to you our Faculty of International and Political Studies where students from Kansai are coming. We had several visits from your University.

This is also a good example of a university faculty located in the old educational building. In the past, before 1939, it was a private school for girls, a kind of junior high school. Since 1945 it has been a part of the University of Lodz, which is now 70 years old. Our University was created after the Second World War, in 1945. I believe honestly that sometimes these old buildings are very well adapted to the educational function. I am very much in favor of keeping these old buildings and continuing their former functions inside.

In Lodz, you may also see some interesting, historical examples of Art Deco and Art Nouveau buildings, which were renovated by public universities. It happened only within last 20 or 25 years.

This is also such a good example from the University of Lodz. This building is a new President's Office. It is also an old school for merchants. The school was established in

the early 20th century and it also became a part of the University in 1945, after the Second World War. Now, just a couple of weeks ago, when the restoration was completed, it will become a very nice and prestigious place and the main building for the President Office of our University.

I would like to finish my presentation with some examples of modern academic architecture. I think that it is also very important to find some harmony and equilibrium in city development between the new spaces created from the beginning, and the old ones which I showed you before. We could see some good examples of adapting old architecture for new academic functions.

I would like to show you also our new and modern Faculty of Philology, which was inaugurated in 2014, at the beginning of the new academic year. This is a very interesting example, because it shows you that the University of Lodz is an interesting combination of modern and old architecture.

This building is a part of the Academy of Fine Arts. The city of Lodz is very well known for its textile industry tradition. We believe that in the future our city's competitive advantage could also be linked with creative industries, new brands, and new technology also with the use of traditional experience of the city. So you may see it.

And this is a very interesting example because it is a combination of old and modern architecture. This is a building of the factory of the 21st century engineers. It is a part of the Polytechnic so it is full of engineers. This very innovative project was inaugurated by the Prime Minister Tusk, who is now the President of the European Union. This is also a very good example of a creative combination of innovation and education, connected with new technology and environmental protection, the use of energy.

This is also a very modern building, equipped with modern and innovative infrastructure. This is also one of the most modern engineering faculties in Poland. This academic project was financed jointly by the European Union and by the Regional Operational Program Innovation and Environment. The total budget was ca. EUR 14 million, only for this building. Thus, I think that in the case of Lodz, we may say that public universities were the best beneficiaries of European funds. They also used European funds in a very good way, creating new academic space and new, modern opportunities for students.

This is one more example. This one is called Biederman Palace, which belonged to a German family of factory owners. Today, the palace belongs to the University of Lodz

and it is used very often as a place for conferences, meetings or special events. It is a very prestigious and unique place with a very nice park around. It was typical of the 19th century in Lodz to have a palace and a factory in a close proximity. In this case around the palace we also have a very nice park. The University of Lodz takes care of this old and splendid park.

We also have to mention historical buildings of our famous Film School. It is also situated in an old palace, which belonged to the Kohn family. It was a Jewish family from Lodz.

And maybe one of the last pictures. This Academy of Fine Arts. It shows you not only historical identity of our city but also its green environment and the green face of the city. This green space around the Academy offers us excellent space for outdoor events, exhibitions and meetings promoting different forms of arts.

And just before I finish this presentation I would like to show you one more example. I would like just to stop for a moment on that picture. This modern ecological building is called the Green Horizon. It is one of new investment projects. Green Horizon means that investor took into account also new and green technologies. It was a Swedish investment project run by Skanska Company, which is very active in different infrastructure projects in Poland, very often co-financed with European funds.

In this building we may find several international outsourcing companies operating in Lodz. It is also quite interesting that these new buildings are located closely to the university campuses. A lot of students are employed in these outsourcing companies, so they may walk only five or ten minutes from the place where they study to work in these companies that offer very flexible working hours. This is also a good example of new synergy between foreign investors, the city of Lodz, and the University. So once again, we may talk about this triangle reflecting new partnership between foreign investors, the city and University.

I would like to finish with some future challenges for the city. I think that the key challenge for the city and the University consists in seeking joint common positioning as an international academic city. The city of Lodz, its public universities should develop joint and consistent strategy promoting the city as a very attractive place to study. We share some key values, such as innovation, creativity, entrepreneurship, openness, and internationalization, which - we believe - are fundamental for the brand of the city and also for the brand of higher education institutions in our city.

So, I hope that in my presentation you could find some values, which are important to young people and to foreign investors. I hope that it has encouraged you to come to Poland and especially to discover the city of Lodz, as a place with a future, which is really an interesting place to study and to invest.

Thank you very much for your attention. . Thank you.

“AMAZING CITY ŁÓDŹ – THE LAST UNEXPLORED CITY”

Marek Janiak

(City Architect of Lodz / Professor, Lodz University of Technology)

※ポーランド語でご講演だったため、日本語通訳のみ掲載

今、経済・政治の専門家の方々が建築について詳しくご説明してくださったので、やや驚いているところです。私は、これまでにみなさまがお聞きになった建築に関する事柄を専門家の立場から、お話ししなおすことにしたいと思います。私の公演の標題は、「驚くべき街一発見されていない最後の街」です。残念ながら、ウッジという街が大方によく知られていないことが、このように題した理由です。

これは、私の前のプレゼンテーションにおいてすでにご覧になられたのと同じ地図ですが、改めて強調しておきたいのは、わずか3000人だったウッジ市の人口が50万人に増えるまで、わずか60年しかかからなかったということです。それに伴って、都市構造が激変しました。

今、私が今用いている、都市中央部または大都市部という呼び名は、2010年につくられた新しい用語です。ウッジ市は、恐らく世界で最も多数、「史跡」と呼べる建築物がある場所です。19世紀に急速な発展を遂げたヨーロッパの他の街、例えばウィーンやベルリン、ロンドン、ニューヨーク、パリなどと似た構造を持っているのです。

今、私が指し示しているのは、この街の歴史地区ですが、二つの世界大戦の間にまったく破壊されずに残りました。アンジェイ・ワイダ監督がウッジを舞台に映画「約束の土地」を撮ったのは1970年代ですが、当時、19世紀に造られた工場がそのまま稼働していました。その場所で、19世紀の物語をロケ撮影したのです。

ところが、第二次世界大戦後、共産党政府が史跡の価値を重んじることなく、街の辺境に、大きな横長のコンクリート製の建物から成る団地を造る決定を下しました。史跡地域が軽視された結果、史跡が多数ある都市中央部の歴史地区の経済的、建築的荒廃がもたらされました。

今から皆さまにとっても美しい写真をお見せしますが、これは歴史地区の中で、良い状態で保存されている20~30%の建物であって、それ以外は見捨てられて荒廃してしまいました。今日のお話はなるべく明るい調子にしたいので、専らこれら20~30%の建築の写真をお見せします。

ウッジはEXPOに立候補していますが、そのスローガンとされているのは、「都市の再生」です。これから皆さまに写真をご覧いただき、都市を再生することにいかに大きな価値があるかということをご理解いただきたいと思います。

この歴史地区の全面積は1600m²ですが、その中に1万~1万1000戸の第2次世界大戦以前に造られた建物が残っています。もう一つ、ウッジは工業都市ではありますが、あくまでも軽工業都市でした。炭鉱があつたり製鉄があつたりするような重工業の中心地ではなかったので、さまざまな性格を持つ建物が混淆して歴史地区に建てられることになりました。例えば、集合住宅や宮殿、工場などの建物が1カ所に建てられているのです。

従って、ここの地域に行くと、さまざまな様式の建築が一地域に同時に建てられるとい

う建築の「混淆様式」がそのままに保存されています。これは、19世紀に急速な発展を遂げたヨーロッパ、アメリカ、日本などの都市にも見られる現象です。

ウッジにはまた、古い石造の集合住宅が多く保存されていて、大都市部に4000近くあります。

パリ、あるいはウィーンのアールヌーボーに負けないような美しいディテールを誇る建築物も多数あります。

現存している石造の建築物の多くにおいて、その内部がとても良好な状態に保たれているのも特徴的です。第二次世界大戦後、それらの建物の内部に国立機関が設置されたこともその理由の一つです。ほとんどの場合は、大学でした。そのおかげで大変良い状態で今日まで残されているのです。そのうち27の最も価値の高い宮殿や屋敷は、大都市部にあります。より小規模の建物が120、同じく中央部にあります。残念ながら、その多くはこの写真に見られるような美しい状態にはありません。

最も興味深いのは工場の数が極めて多かったことです。都市のまさに中心部にこれだけ多数の工場があるということは驚くべきことではないでしょうか。戦前の統計によると、ウッジ市中に工場が約1000もあったそうです。

それでは現在、工場建築はいくつあるのか？ 建築物の分割や統合が行われたので、答えを出すのは容易ではありませんが、約300です。そのうち50が再生され活用されています。

多数の工場の一つ一つが、世界の他の街に類例を見ないほど、建築的に美しいディテールを有しています。塔のような装飾を持つ工場が多いのはその特徴の一つです。まるでゴシック様式時代かロマン様式時代の王城、または騎士団が建てた城塞を連想させる建築スタイルです。

今お見せしているスライドに映っている、再生された元工場建築の内部には、今日、ロフトと呼ばれる住居空間があったり、ビジネス用の建物があったり、事務所や文化機関があったり、博物館や大学があたりします。この写真は、ポズナンスキ家の宮殿に造られたホテルです。その脇にはわれわれの事務所が位置しており、私とその設計を担当しました。

私たち建築家にとって非常に困難な、しかし達成した際に喜びを引き起こすような課題は、歴史的な部分と現代的な部分をいかに調和させるかです。これは19世紀の建物で、その一部分は既に再生が完了していますが、さらなる作業を経た後によりよく開館式に至るはずの部分も残されています。現状については、ぜひ現地で直接ご確認ください。

もう一つ、ウッジが誇るべきこと、また、大変興味深いことは、市中に33の歴史的な価値を有する公園が存在することです。今みなさまがご覧になっているのは19世紀の実業家たちが建造した工場ですが、彼らはただ単に工場や自分たちの住む屋敷、労働者の住居を建てただけでなく、緑の都市ウッジをつくるように配慮しました。その意味で、ウッジという街は非常に 트렌ディな、そしてエコロジカルな街であるともいえます。

こうした緑地帯が正しく都市の中心部に、広範に広がっているのです。

このスライドに映っているのは、集合住宅の中庭ですが、必ずしも今日の建築基準に適合するものではないため、どのようにすればかつての魅力を失わずに、また緑を保ちつつ

改造を進めていくかは今後の課題です。

最後に、申し上げたいことがあります。ウッジという都市にはかつて、活発な労働力を構成する人々が住んでいました。彼らは、ウッジ市から姿を消してしまいました。ここから、ウッジを創造的な都市にしていくために、どのようにすればいいかという課題が立ち現れてきます。歴史的な価値を失わないようにしながら、新しい創造性を生み出すするにはどうすればいいのでしょうか。

これはウッジ市だけの問題ではありません。ポーランド、ヨーロッパ、さらには世界に関わる問題であるといっても過言ではありません。なぜならば、ウッジ市の建築物には世界的な価値があるからです。

ご清聴、ありがとうございました。

“グローバル競争環境における都市政策について
—大阪・関西と欧州都市の事例考察—”

藤原 直樹

(大阪市立大学経営学研究科附属先端研究教育センター特別研究員)

- 今日の大阪、関西は一国に相当する経済規模を有している。江戸幕府成立前後から急速に整備が進められた大阪は、全国から物資が集散する土地になり、その後、大阪商工会議所や大阪市立大学の基礎を創った五代友厚などの活躍により、綿紡績・鉄道などを中心に、それを支える商社や銀行などの活動が一体となって「東洋のマンチェスター」と呼ばれるようにまで成長した。
- 英国の経済雑誌エコノミストの調査部がまとめた世界の都市の住みやすさランキングで大阪は13位であり、Best City ランキングによれば3位である。その評価項目として国際連携度が注目される。
- 今日のグローバル経済において、知識や情報が生み出すイノベーションが地域の競争力の源泉である。イノベーションを創出するためには、知識情報の「多様性」と「関連性」が重要であり、新しい知識がその地域に流れこみ、多様性を高めるとともに、既存の知識との混合から生み出されるアイデアが価値を持つ。
- 産業集積（クラスター）間の交流から新しい知識を生み出すには、地域間・国家間の戦略的なパートナーシップが重要である。コペンハーゲン環境クラスターは、環境技術分野での中小企業の成長支援と気候・環境に関する社会的課題の革新的で持続的な解決方法の開発と実行により、デンマークの経済成長と雇用を拡大することを目的に設立された。国際面でデンマークの環境技術の窓口としての役割を果たし、デンマークの環境技術を宣伝することで国際的な認識を高めるとともに、外国パートナーとのネットワークを通じてデンマーク企業の国際化を支援している。
- その組織は、トリプルヘリックス（3重螺旋）と呼ばれる産官学のステイクホルダーから構成されており、地域に埋め込まれている政府、企業、大学、研究機関などのアクターが協働して、地域の産業の強みや技術といった地域資源を認識し、これらの能力の上に戦略的な多様性を確保しようとしている。
- コペンハーゲン環境クラスターは、環境技術クラスター間での国際的な協働プラットフォームとして、地域間の協働を高め、産業界、大学などの研究機関、そして地方自治体間での知識共有を拡大して、新しいビジネス機会を生み出し、競争優位を拡大しようとしている。
- グローバルな競争環境における都市政策としては、地域の特徴に応じた海外ネットワークを戦略的に構築することが重要である。国の首都がその国の国際的な関係をすべて集約することになると、その他の都市は衰退する。第2、第3の都市が直接海外とつながることにより多様性が生まれ、イノベーションが生み出される土壌が形成され

る。それは、国全体にとってもメリットがあると考えられる。

【登壇者紹介】

藤井和夫（関西学院大学経済学部教授）

1950 年生まれ。関西学院大学経済学部卒業、同大学院修了。経済学博士。現在関西学院大学経済学部教授。

市川顕（関西学院大学産業研究所准教授）

1975 年生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、同大学院政策・メディア研究科修士課程・同博士課程修了。博士（政策・メディア）。現在関西学院大学産業研究所准教授、同副所長。国際公共経済学会理事、政策情報学会理事、日本計画行政学会関西支部幹事。国際関係論、拡大 EU、環境ガバナンス専攻。

吉田勝一（ウッジ大学国際関係政治学部東アジア学科日本学講座専任講師）

1953 年生まれ。札幌大学ロシア学科卒業、北海道大学法学部附属スラブ研究施設研究生（指導教官外川継男教授）を経て 1978 年ウッジ大学、ワルシャワ大学教育学部教育研究所大学院課程留学。1982 年ポーランド日本協会日本語教育文化普及指導責任者としてポーランドに赴任、ウッジ工科大、ヤギェウオ大学日本学科専任講師（国際交流基金講師謝儀助成プログラム）を経て、ウッジ大学国際関係学部立ち上げスタッフとして日本関係を担当。現在同大学国際関係政治学部東アジア学科日本学講座専任講師。JICA 青年海外協力隊ポーランド隊受け入れ世話人、(法) 梅田良忠教授記念ポーランド日本教育文化センター代表。ウッジ市功労賞 (Za Zaslugi dla Misata Lodzi 2000)、ポーランド政府叙勲 (Kryzyz Kawalerski Orderu Zaslugi Rzeczypospolitej Polskiej 2002)、国民教育省コミッションメダル (Medal Komisji Edukacji Narodowej 2012)、ウッジ県知事賞 (Nagroda Marszalka Wojewodztwa Lodzkiego 2010, 2012)、日本政府外務大臣賞 (2011) などを受賞。

Tomasz Domański (Professor, University of Lodz)

トマシュ・ドマンスキ（ウッジ大学国際関係学部教授）

1953 年生まれ。ウッジ大学を卒業後、フランス Université Grenoble II で国際経営を修了。ウッジ大学の国際関係学部の創設から携わっており、現在同大学の国際関係学部教授、学部長。

Marek Janiak (City Architect of Lodz / Professor, Lodz University of Technology)

マレク・ヤニアク (ウッジ市アーキテクト/ウッジ工科大学教授)

1955 年生まれ。ウッジ工科大学建築・都市計画学部修了。1979 年「ウッジ=カリスカ」グループ設立。1980 年に創設者の一人としてピョトルコフスカ通り基金設立。1992 年から現在までピョトルコフスカ通り基金代表。2003 年に造形美術(写真専攻)教授資格取得、2005-2007 年ウッジ人文経済大学教授(芸術写真科目担当)。2006 年ウッチ工科大学教授に就任、2006 年-2008 年ウッジ美術大学教授。1979 年から 2011 年の間に約 180 の内装・建築オブジェを設計、1971-2011 年の間に、約 300 の個展、団体展、または「ウッジ=カリスカ」グループと共同で実現した展示会に出品。共著書・アルバム多数。

藤原直樹 (大阪市立大学先端研究教育センター特別研究員)

1974 年生まれ。大阪市立大学商学部商学科卒業、同大学院創造都市研究科都市政策専攻都市公共政策研究分野修士課程、同大学院経営学研究科グローバルビジネス専攻後期博士課程修了。博士(商学)。現在大阪市立大学経営学研究科附属先端研究教育センター特別研究員。

- 当報告書は 2015 年 11 月 29 日にグランフロント大阪北館ナレッジキャピタルカンファレンスルームタワーで開催された EU インスティテュート関西 (EUIJ 関西) アカデミック・シンポジウムの内容を再現したものである。

EU インスティテュート関西 アカデミック・シンポジウム
よみがえる『約束の土地』－ポーランド第2の都市ウッジの魅力と都市再生－

開催日時	2015年11月29日
開催場所	グランフロント大阪北館タワーB 10階 ナレッジキャピタルカンファレンスルームタワーB Room B 05+06+07
主催	EU インスティテュート関西 (EUIJ 関西)
共催	関西学院大学産業研究所 ポーランド広報文化センター 日本ポーランド協会関西センター

EU インスティテュート関西 アカデミック・シンポジウム
よみがえる『約束の土地』－ポーランド第2の都市ウッジの魅力と都市再生－
報告書

2016年3月7日
編集 関西学院大学産業研究所 准教授 市川 顕

発行 関西学院大学産業研究所
〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155
電話 0798-54-6127
